

一般演題

一般演題 (e-ポスター) 07

気分障害 3: 高齢者、その他

📍 オンデマンド配信限定セッション 📍 オンデマンド配信

G07-02

* 高齢発症のラピッドサイクラーで初発した特発性大脳基底核石灰化症と考えられる1例

[演者] 橋本 剛志:1,2

[共同演者] 石飛 信:2, 橋本 卓也:1, 林田 和久:1, 松永 寿人:1

1:兵庫医科大学精神科神経科学講座, 2:医療法人寿栄会有馬高原病院

【はじめに】高齢(50歳以上)で初発する双極性障害は全体の5-10%を占め、好発年齢に発症するケースに比して器質的要因がより関与していることが示唆されている。特発性大脳基底核石灰化症 (Idiopathic basal ganglia calcification:以下IBGC)では多彩な神経・精神症状がみられ、精神症状としては気分障害の報告例が最も多いとされている。今回、IBGCを有し高齢期にラピッドサイクラーで初発した双極性障害の一例を経験したので文献的考察を交え報告する。尚、患者から発表及び論文化の可能性については同意を得ている。

【症例】72歳女性。X-8年より数か月おきに軽躁状態とうつ状態がみられるようになった。うつ状態が強まったときのみ精神科を受診し、短期間抗うつ薬の服用を行ってはすぐ断薬していた。X-1年11月以降は一切精神科受診もしなくなったが、急速交代型気分変動は持続していた。X年5月より軽躁状態に加え、「死んだ弟が生きている」と述べるようになり徐々に被害妄想、幻聴も出現したため当院入院となった。

【経過】炭酸リチウムとオランザピンを主剤とした治療により約3週間の経過で幻覚妄想は消失し、気分も安定化した。頭部CT検査では年齢相応の全般性萎縮に加え、両側の大脳基底核に直径10-12mm程度の石灰化を認めた。血液検査、既往歴含め副甲状腺機能異常などの二次性石灰化をきたす疾患は確認できなかった。寛解時に施行したHDS-Rでは20点と軽度認知機能障害の合併を認めた。

【考察】高齢発症の双極性障害の器質的背景としてIBGCが考えられた一例である。本症例では気分症状に対する薬物療法の反応性は良好であったものの、認知機能障害は不可逆性であった点は既報と一致した。大脳基底核は運動機能や認知機能、情動のコントロールに重要な脳領域であり、BGCを有する双極性障害の患者では認知機能障害・神経症状の合併に留意した長期的フォローが必要である。